「何か……言い残すことはある？」

それは何処にも――有り得なかった世界。
存在しなかった少年を消却することには、痛みも罪も、あるわけがなく。
ただの幻に過ぎない時を、どうして少女は。
そこまで現に……その銀色の髪で赤い目の少年を、真の存在と感じてしまったのか。

「……――え？」

その時少年の赤い目に、辛うじて映ったのは。
背後から自身を貫き、自身の血で染まった、細い――白い鎌の、刃先だけだった。

――誰か助けて。
叫び続ける声は、幻が消えた後も消えず。

「……アレ……？」

幻の中でそれを受け取った金色の髪の少年は、

「……ラピスって、誰だっけ？」

有り得なかった誰かの名前を、ただ呟いた。

Ｃｒｙ　ｐｅｒ　Ｂ／ＡＲ．

—Atlas' regurgitation—　trial Ver.

「もう、本っっ当に！　すみませんでした！」
ぺこぺこぺこぺこぺこ。
突然、その広い御所の正門――閑静ながら庭木の華やかさが評判の、ジパングは京都の、『花の御所』という貴族の邸宅の前で。
「いやいや。ラピ嬢ちゃんが謝る事なんて、何一つないだろ」
「……」
御所を守る侍と見える、がっしりとした体で帯刀している男に、ひたすら頭を下げまくる……年端もいかない少女に逆に焦る侍の男と。
その隣で黙り込み、怪訝な顔付きで少女を見る――侍と同じような恰好をして、しかし腰には普通の刀とは遥かに違う、珍しい剣を下げている金色の髪の少年に。
「ほら、ユーオンもちゃんと、お礼言って！　と言うか謝って！　死ぬ程頭下げて、陳謝！」
「……」
半ば本気らしい少女に、呆気にとられてか。
侍と共に、黙り込んでしまった少年だった。

「うわ。ラピちゃんだ、本物のラピちゃんだ」
「……」
広い御所の一室に通され、その部屋で現在は生活させてもらっているらしい、相変わらず黙って俯いた金色の髪の少年を、家族として瑠璃色の髪の少女は迎えに来たらしく。
たまたま遊びに来ていた、帽子の似合った同年代の少年と、
「本当、会うの久しぶりよね。秋くらいからいなかったしね？」
「うん。鶫（つぐみ）ちゃん、久しぶり」
元々その御所に住む、肩までの長さの綺麗な赤い髪の少女が、快く出迎えてくれていた。
「ラピちゃんと最後にゆっくり遊んだのって、花火の時以来だよね？　元気してた？」
「って、くーちゃん。その後だって何回も、伝話してるよね？」
不思議そうにする瑠璃色の髪の少女に、
「だって声だけじゃやっぱり、わかんないよ。ひょっとしたらＰＨＳの向こうでは、何かがあってぶるぶる涙を流しながら、声は笑って顔は号泣なんて事もあるかもしれないし！」
両手を握り締めて力説する相手に、
「そうだね。万一には刃物を突きつけられて、でも何も言うなとか脅されてる可能性だって、絶対ないとは言えないもんね」
顔が見えないって怖いねぇと、無責任に笑い相手を煽る、深い青の目の少女だった。
その、常に笑顔を絶やさないような感じの、瑠璃色の髪の少女はラピス・シルファリーといい。この御所のある『ジパング』という、世界地図では中央に位置する島国とは違い、『西の大陸』という、比較的商業など文明が発達した地の、しかし山奥で育った少女で。
「ほんとにごめんね、鶫ちゃん。うちまだ、しばらくおとーさん達、帰りそうになくて」
「相変わらず、あちこちお忙しいのね」
実の両親を六歳の時に亡くし、今の養父母に拾われ、彼らと様々な土地を旅するラピスを知る少女は、息を着くようにラピスを見る。
「親が飛び回ってると、子供は大変よね」
「私は全然いいんだけど、まさか……」
そしてラピスは、不服そうに座り込んでいる金色の髪の、尖った耳をした紫の目の少年を、悩ましさ満点の顔付きで見つめた。
「まさかユーオンが……鶫ちゃんのお家で、お世話になってたなんて」
「……」
「僕もまさか、ユーオン君が、ラピちゃんのお兄さんだなんて。思いもしなかったよ」
ラピスはくーちゃんと呼ぶ、実際は椢（くぬぎ）という名の少年は、鶫という目の前の着物の少女を始め、他にも友達の住むこの『花の御所』に、少し前から保護されている金色の髪の少年について――そこに至る事情を、黙ったままの少年の代りにか、話し出してくれた。

その日はとても、秋のわりに暑い日だった。
「それなのに、真冬ばりの旅人用ケープを、全身隠すみたいに着込んでるから。ホントに、びっくりしたよ」
「うわぁ……何その、満点の怪しさ……」
用事で京都の南の町境近くまで来ていた櫃は、そんな怪しげで、しかし年若い人影につい、目線を向けてしまい。
――……ちょっといいか？――
自分の方を見た櫃に、怪しげな人影は、
――梅何とかって占い師を探してるんだけど――知らないか？　と。声色は至って普通の――むしろ優しげな、気安い調子で尋ね。
運悪く、その人影の探し相手に心当たりの有り過ぎた櫃は、
「めちゃくちゃご近所だよって答えた以上、連れてってあげなきゃって、思うよね」
「くーちゃん……相変わらずお人好し……」
そうして人影を京都まで、連れてきた櫃だが。

その占い師のいる場末まで行く道で、偶然、この御所に住む他の友達――烏丸蒼潤（そうじゅん）と、その弟の悠夜にばったりと会い。
聞けば二人も、知り合いである占い師から、大切な用事があるから来るようにと緊急に、式神という通信手段で連絡を受け、占い師の元に向かっているとの事だった。
「それなら後は、蒼ちゃん達に任せようって。そう思った矢先に――」
彼らが鉢合わせした、ひと気のない竹林に。
彼らがそれまで全く見た事もない――唐突で不可解な襲撃者は、現れていた。
「天使……人形？」
「うん。悠夜君は、後でそう言ってた」
ラピスの顔付きに知らず、走った緊張に。
その時の事を思い出し、既に緊張しきっていた櫃は気付かず、話を続ける。

「僕達とそう変わらない大きさなんだけど、背中に黒いもやっとした羽がある、糸のない絡繰人形みたいなのが。蒼ちゃんと悠夜君に、空から襲いかかったんだ」
襲撃の人形は少なくとも三体はあり、咄嗟に弟を守るように、刀で応戦する蒼潤と。
全く初見で相手の情報がわからないながら、呪術と呼ばれる力を使い援護出来るような、まさに天才と呼ばれる……しかしまだ幼く、体力の拙い悠夜に。
「蒼ちゃんに直接向かってくればともかく、人形は悠夜君ばかり狙ってね。まさに多勢に無勢で、その上に……隠れて様子を窺ってたらしい別の人形が、いきなり現れて」
三体の人形を同時に相手していた、蒼潤がさすがに対応しきれず。
まさに襲撃者側の切り札だっただろう――疲れ始めた悠夜だけを狙う卑劣な魔の手を、新たな人形は容赦なく伸ばしたのだが。

――……えっ！？――

その奇襲を察知し、それを止める事だけに、全力を向けていたかのように、

――逃げろ！　こいつらアンタを攫う気だ！――

全身を覆うケープを脱ぎ捨てて、銀色の髪で青い目をした少年が突然飛び込み。

人形達が武器としていた大きな鎌の一閃を、ジパングでは珍しい形の剣で食い止めると、剣から発した白い光が、人形に触れた途端、何故か人形の内部でのみ、激しい衝撃の嵐が吹き荒れたようだった。

しかしそれは、その少年には相当の無理で、限界だったようで。人形がその後、爆発して崩壊する事も察していたようだが――それを回避出来ず、衝撃をまともに受け。

そしてその人形が、完膚なきまでに崩壊し、残りの人形が一度彼らから距離をとった時に、櫃がＰＨＳで救援を求めていた、京都の町の警備隊が到着していた。

「その後は、人形達は何処かに消えちゃって。蒼ちゃんはぐったりしてる悠夜君を連れて、すぐに御所に戻ったんだけど」

人形が爆発した衝撃で剣を弾き飛ばされ、気を失っていた少年は、何故か、櫃が最初に姿を見た時とは違い、髪が金色になっており。

「そっか……銀色さんが、出ちゃってたんだ」

「……」

ラピスが『銀色さん』と名付けている、その少年にたまに起こる変化は、

「それにしては、凄く紳士的だね。ちゃんと喋れたんだね、銀色さんも」

少年がその状態となる時はいつも、物言わず、破壊行動ばかりとる事をラピスは見ており。

それを育ての父が少し前に止めた時に。

ただその『銀色』は、冷たく暗い青の目で……一言だけを養父に尋ねていた。

――何で……殺さないの？――

ラピスのその、一見呑気な感想に、思わず笑っていたのが鶫だった。

「なるほど、銀色さんね。それなら普段は、金色さんって呼べば良かったのかな」

「……それはイヤだ」

鶫の面白そうな顔に、そこで初めて、ずっと黙り込んでいた少年は口を開き。

「ツグミだってクヌギだって、言い難いのに」

それでもちゃんと、呼んでいるのだからと。

不服そうに鶫を見返した少年に……ラピスはあれと、懐かしい不思議現象に気付いた。

「ユーオン……ジパング語、喋れたっけ？」

喋れるわけがない。現に今も、西の大陸ではよく使われる共通語……ラピスには母語で、少年は喋っている。

けれどこの御所にいる、鶫や蒼潤、悠夜。

そして櫃には、それでも何故か言葉は通じ。

そして少年の尖った耳に、片方だけついた装具は、ラピスが昔使っていた翻訳機だった。

ようやくそうして、鶫に対して口を開いた少年だったが。何故か未だに、ラピスの事は見ようとせず、これまでは当たり前のように見せていた笑顔が全く出ない。

「それで、くーちゃん。そこからどうして、ユーオンはここでお世話になる事に？」

仕方ないのでラピスは、続きをきく事にする。

「うん。ユーオン君はそこで、警備隊の人に保護されたんだけど。怪我は大きくないのに、何でかその後、全然目を覚まさないからって。事情聴取も出来ない、何とかしてほしいって、蒼ちゃんのお父さんに依頼がいったんだ」

昔、その父はこの少年と同じように尖った耳を持つ少年を、一時期保護していたという。

結果的には、その種別は違ったのだが……目を覚まさない原因は、何と似たり寄ったりだったらしく。

―この少年の持ち物は、何かないか？―

あるペンダントを身に着けていなければ、身動きがとれなくなる、青銀の髪の吸血鬼を知っていた彼は。

その剣が近くになければ、意識を保つ事も出来ない精霊族の少年を、難なく看破し。

人形が爆発した時に飛ばされていた剣を、少年の傍に置いた直後に、少年はすぐさまに目を覚まし、飛び起き……紫の目を丸くして、自分の目を覚まさせた男、烏丸頼也という、とある筋に有名な力の持ち主である、普段は『花の御所』の一公家である男を観て。

―アンタ……何者？―

不思議そうに少年を見る男を、それ以上に不可解かつ怪訝な顔で、剣をしっかり抱えて怯えるように少年は見返していた。

「へぇー……ユーオンって、そうだったんだ」

そんな少年の事を、半年は共に暮らしながら、さっぱり知らなかったラピスは。

多分あえて黙っていた少年に気付くように、意味ありげな視線で少年を見る。

「結局、あの人形達の事はユーオン君も何もわからなくて……ただ大変そうだったから、加勢しただけだと思うって、言ってたけど」

銀色の髪の時の自分を、少年はいつもあまり、覚えていないらしく。

「とりあえずユーオン君、身寄りもないって言うし、普通じゃなさそうなヒトだったから。どうするかって警備隊も悩んだみたいだけど」

しかしそんな不審な少年の事を、烏丸頼也は、身元引受人となると自ら申し出る。

子供を助けてくれた相手でもあると、彼は至って快く、少年を引受けようとしたのだが。

「でも、そこからが……想定外と言うか。大変だったみたいなんだぁ」

「……え？」

嫌な予感がする……とばかりに、ラピスは、ちらりと横目で少年を見るのだった。

「本当ね。拘置所から出すと言ってるのに、嫌だなんていうヒト、早々いないでしょ」
「えぇ……？」
何故か頑として、烏丸頼也の手をとらずに、拘置所から動かない少年に。
仕方なく彼は同じ御所に住む、彼の護衛のような存在である山科幻次――先程ラピスを正門で出迎えてくれた、鵜の実の父である、ガタイのいい男を呼び出し。ほぼ力づくで、少年をこの御所まで連れてくる事になった。
「ちょっと……ユーオン……」
「……」
最早白い目を隠さず、自分を見るラピスに、少年は相変わらずだんまりを続ける。
身元引受人となる条件として、少なくとも一カ月は、少年を保護観察下に置かなくてはいけなかった烏丸頼也に、しかし少年は、
―オレ、ここにはいたくない―
御所に来てからもひたすらその一点張りで。
逃げ出したりなどの問題は起こさないが、御所が嫌なら拘置所に帰るしかない選択に、それでいいと頑なな少年に、年の近い子供がいることもあってか、彼らはそれをむざむざ送り帰すような選択は決して取らず。
「蒼も頑固だけど。ユーオンのはもう完全に別種よね」
「……一緒にしたら、蒼潤君が可哀相だから」
そんな少年の頑さも、これまでは目にせず、正直知らなかったラピスはただ呆れる。
ようやく、その後少年が御所に落ち着けるようになったキッカケは、
「でも、何でなんだろうね？　ユーオン君、あの時は凄い強そうだったのに……今は全然、蒼ちゃんの足元にも及ばない感じだよね」
「……うるせー」
日がな、食事も拒否して門の横に座っていた少年は、山科幻次と烏丸蒼潤に、剣の鍛錬に誘われ、それには何故かあっさりついていき。
「なるほど。つまり、ボコボコだったんだ」
これまで何度もラピスは、金色の髪の少年がラピスの養父や親戚に、全く手も足も出ない姿を目にしており。酷い事にはただの人間のラピスが嗜む護身術すら、少年は敵わず。
一緒にいた半年間はひたすら、自宅で体の鍛錬をするだけの生活を、少年は送っていた。
「それで……鵜ちゃんのお父さんに弟子入りさせてもらった、って事だったんだ」
「……」
それから、山科幻次一家の居室に近い、この部屋を借り受けた少年は、弟子の仕事として自発的に、雑巾がけや庭の掃除をしたり。
剣を自然に、肌身離さずにいる方法として袴の着用を助言されたり、その後に初めて、着物に袖を通してみたりと、少しずつ何とか、御所に馴染んできた頃合いという事だった。
「掃除とかしなくていいってみんな言うのに。本当に、弱々なわりには頑固よね」
しみじみ言いながら、面白そうに少年の頭をぽんぽんと叩く、剣の師の娘たる鵜だった。

「――っても。ソイツのは弱いっていうより、何かの理由で、体が動かないだけっぽいが」
がらりと、突然に障子が無遠慮に開かれ、少年にとっては兄弟子となる誰かが現れた。
その姿にラピスは、改めて嬉しそうに笑い、
「蒼潤君だー。久しぶり～」
「ああ。懐かしい顔がいるな」
夕焼色の鳥頭で、硬派っぽい表情の少年――鶫の従兄である烏丸蒼潤は、性質的にまさに対極と言えそうな常時笑顔のラピスに、少し笑いかけてくれつつ、その子供会へと自然に参入するのだった。
「……ジュン。今日はゲンジは？」
ソウジュン。と兄弟子の名を口にするのは、言い難さが限界を超えるらしく、と言って、ソウと呼ぶのも何処か収まりが悪いようで、少年は蒼潤をそう呼ぶようになったらしい。
「ユオンの身元がわかったぞって、父上と、警備隊のとこに報告に行ってる」
対する蒼潤も、微妙な省略ぶりで少年を呼ぶ。
それは実は、少年の正式名称でもあったが。
「でも蒼潤君。身元って言っても、うちまだ、おとーさん達帰ってきてないから。謝りにもお礼にも、当分来れないんだけど……」
だから代りに、頭を下げたらしいラピスに、
「謝る必要なんてないだろ。警備隊の都合で、ユオンをここにいさせただけなんだから」
それよりと、蒼潤は不思議そうに、今ここにいるラピスをちらっと見返し、
「それじゃお前、一人でジパングまで戻って来たのか？」
これまでどうしてたんだ？　と。
本来なら、ラピスと同じ養父母に保護され、兄貴分とも言える少年が尋ねるべき事を――ようやく、場の話題にした。
「うん。私は、ずっと――……」
そしてラピスは、彼女の記憶を思い起こす。
『南の島』。遥かに遠い『神暦』の世では、『火の島』と呼ばれていた程、古来は灼熱の大地であったらしいその島は。
十五年前には、四天王などと呼ばれている、東西南北の治安維持者――監獄を持った城を管理する者達しか住んでいなかったような、ジパングからは南に位置した島なのだが。
「今はもう、港町から始まって、かなり沢山ヒトが移住してるみたいでね」
ラピスはしばらく、親戚である水華（みずか）という少女と、その島の四天王城の主に保護され、その主の甥と姪にあたる少年少女達と、島の学校という場所に、体験入学していたという。
「元々は、水華のご両親を探すために一緒に旅に出て。でも途中で置いてかれたり、また捕まえたり、後は、死神らしい吸血鬼さんの案内で、『北の島』に探検に行ったりしたよ」
ラピスがそうした、水華との旅に出る前に。
このジパングに家を持った養父母に、丁度ある国から召集がかかっており。

「私とユーオンをどうするか、おとーさんもおかーさんも、凄く悩んだみたいなんだけど」
これまでは大体、養父母はラピスを連れて、世界のあちこちを旅していたのだが、それはひとえに、持ち家に一人で、ラピスを残していく事が心配だったからであり。
春頃からもう一人、金色の髪の少年という養子が増えた彼らは。全身傷だらけで倒れていた、しかもそれまでの記憶がないという、完全にわけありらしき少年の事も、しばらく刺激したくないという思いがあり。
「おとーさん達の旅自体、結構ハードだし。私もユーオンも家に置いていく方が、今回はいいだろうって話だったんだ」
――しかし。唯の人間であるラピスと、その少年……時に『銀色』となる正体不明の者を、二人で残していく事にも、あるキッカケで、彼らは迷いを持つようになり。
「でも丁度、水華が旅に出るって話が、急に決まって。私はそれについてく事になったの」
そうして。ラピスとはたった一歳違いでも、単独で旅を認められるような人間ならぬ少女、水華の旅立ちに合わせて。
同じように、人間のような姿をしながら、人間ならぬ力を持っている千種の化け物――『千族』と言われる、現在は希少な存在たる養父母は、義妹の水華に、とある奇跡を司るアイテムを代々受け継ぐ、しかしただの人間であるラピスを託したのだが。
「ユーオンは、家で留守番してるのが、一番無難だろうって」
「……」
しばらく出かけてきます。留守をよろしくね。そんな書置き一つで、少年を一人で家に残し。
ある朝突然、無人になっていた自宅に、
「……それ、結構鬼じゃない？　ラピちゃん」
茫然としただろう少年の内心を察するように、思わず口にしていた椢に、不思議そうにする……それこそが鬼と言える少女なのだった。
「でもユーオン、本当、引きこもりさんだし」
そもそもあまり、外に出たがらない少年を考えての、養父母の選択でもあったわけだが、
「それなのに何で……わざわざ外に出たの？」
「……」
そうやって置いていかれた事を、余程拗ねているのか何なのか。
相変わらずラピスにはだんまりを続ける、金色の髪の少年の思いを代弁するように、
「梅を探してたって事なら普通に、ラピ達の、行方を知りたかったんじゃないの？」
元々、記憶喪失である少年の名を引き出した経緯のあるその占い師は、蒼潤や鶇の親とも面識のある腕の確かな……しかし悪名高い、悪い事はよく当たるという、占い婆だった。
「少なくとも梅は、俺達を会わせるために、あの日、俺達を呼んだっぽいけどな」
元々親交のあったラピスの、兄貴分となった少年との巡り会いを、蒼潤はあっさりとそう、必然と受け入れているようだった。

＊

一応、異国の滞在者として届け出のある、ラピスの養父母の身元は確認されたらしく。

ラピスもユーオンも、養子としてきちんと登録されており、めでたく保護観察の身から解放されたユーオンだったが。

「……家に帰らないの？　ユーオン」

「……」

相変わらず黙り込んでいるユーオンに、特に困った様子はないが、不思議そうなラピスに、

「今日はもう、ラピも泊まっていけば？」

鶫がそう言ってくれたので、実は初めてこの風流な御所に、お泊り出来る事に嬉しそうなラピスだった。

「でもラピ。いつものペットはどうしたの？」

鶫はそれだけ、不思議そうに尋ねる。

ラピスが常に連れ歩く、猫のような頭の、しかしそこから短い足と尾が生える謎の生物。

その、ラピスの家系では子供の内は、代々共に生きるという謎の生物の不在に、

「あ、ほんとだね。何処いったのかな？」

問題ないとばかり、それだけで返事を流したラピスに、少しだけ鶫は首を傾げていた。

「……」

そうして初めて、ジパング生粋の風流な館で、月の綺麗な夜を迎えたラピスは。

「――眠れないの？　ユーオン」

この御所に引受けられてから、お気に入りの場所であるのか、する事がない時は、縁側で空を見上げることがいつしか常態化していたユーオンの隣にちょこんと座り。

「……」

昼間の怪訝そうな顔とは、また少し違った、無機質さも漂う――青い目で。腰に自然に、剣を下げる袴姿のユーオンの……隣に座った、借り着で珍しい浴衣姿のラピスは、

「綺麗な満月だね……奇跡でも起こりそうな」

「……？」

不可解。と表情だけで見事に表し、ラピスを見るユーオンに、

「知ってるでしょ？　私は奇跡を呼べること」

日に一度だけ、その家が代々伝える宝の笛を、月の光の下で吹く事で呼べる、予測不可能な何かの奇跡と――

しかし、それを呼ぶのに必須であるはずの、宝の笛を身に着けずに、奇跡を起こす本体であるはずの謎の生物を連れていない彼女は。

「銀色（キラキラ）さん。ダメだよ、あんまりおイタしちゃ」

気が付けば、銀色の髪と暗く青い目に変わり警戒を浮かべ、少女を見ていた少年に。

より深い青の目で……そう笑った彼女に。

「……あんた、誰だ？」

銀色の髪の少年は、ただまっすぐ無機質に。

ここまで少年がずっと黙っていた理由――その妹分を騙る彼女、魂の侵入者を観咎める。

――見えて触れる幻。
少女の家に代々伝わった、予測不可能たる奇跡の正体はそんな、反則業の神秘であり。
「ユーオンには……誰に見えてるの？」
くすりと彼女は、何も介入しない相手には、瑠璃色の髪の少女に見えているはずの姿と。
「わたしの事……もう、観えてるんでしょ？」
彼女の本質――『意味』が発揮された時に。
そのとる姿が何であるのか。
「わたしはね。わたしの前にいる誰かさんの、忘れたいものを忘れさせてあげる……そんな『意味』を持った、何かなんだよ」
その姿を左右するのは、彼女自身ではなく、他ならぬ観測者の影響によると、白く微笑む。
あくまで今この時の、彼女の存在は、ただ一夜の幻……少女が呼んだ奇跡に過ぎずとも。
その実態を、既に悟っているかのように。
気配を殺し、隠れたような人形の存在――その奇襲を察知し阻止出来るような勘の良さ、『直観』を持っていた青い目の少年は。
その『銀色』は、あくまで冷たい口調で、『銀色』にとって必要な事だけ確認しにいく。
「……あんたは常に、ラピスの中にいるのか」
この幻は決して――少女が自らの意志で、呼んだ奇跡ではなく。
少女とずっと、魂の主導権を争う彼女が。
その家系に伝わる、奇跡を利用し、少女が知らぬ間に少女の周囲を惑わせている事を。
「そうだよ。わたしがラピスを……ずっと、守ってるんだよ」
わかってるでしょ、と。その『忘却』を司る何かは、『銀色』の失った誰かを映して笑う。
少女が実の両親を亡くしてから約二年後、今の養父母に引き取られたばかりの頃、その幻は大いに養父母を惑わせた事があった。
しかしそれは少女の無意識の希みでもあり、その頃には、手綱をとれていたはずの幻は、
「しばらく、大人しくしてたんだけどな……」
ここ最近のある出来事で――意識の土台を、揺るがされていた少女の隙に付け込む。
「ラピスはもう、わたしの事、拒否出来ないみたいだよ？」
「……」
ある契約によって、少女がその肉親を失った時から、彼女は少女に強制的に巣食い。
しかし少女がそれを悟らないよう、多くの『忘却』を、長くもたらしてきた彼女に。
「あんたは――俺に何をさせたいんだ」
『銀色』の養父母が、その養子達を二人で、その家に残すまいと決めた理由――
『銀色』はただ、冷めた目で彼女に尋ねた。

―何で……殺さないの？―

ある旅先で、ラピスとユーオンを同伴していた養父母に襲いかかった者達があり。

ただの山賊や魔物とは違い、ともすれば、この世界ではトップランクの化け物でもある養父母を、少しなりと傷付ける事も可能な、脅威を持っていた何者かの襲撃の時に。

―……逆にきくが。何で殺す？―

その襲撃者を追い払い、見逃した養父母は、妹分を庇い応戦する中で『銀色』に変貌し、何故殺さないのかと尋ねた養子に。

厳しくも何処か、哀しげな灰色の眼で。

そう『銀色』に、静かに問い返していた。

……その理由はただ、そこにいた弱小な、瑠璃色の髪の妹――人間の少女に、有り得る脅威を潰したい、それだけだと気付きながら。

その問いに、答えられなかった『銀色』はその後、大人しく金色の髪に戻り。

そうなると養子は、何があったかほとんど、普段は思い出せないようであり。

しかしその分、『銀色』程には頑なでなく。

―もっと余裕で、ラピスくらい守れるように。助けになれるくらい、強くなれたらいいな―

『銀色』とは違い、その躯体を思うように動かせない制限の中でも、ひたむきにそんな……それでも『銀色』と同種の願いだけを、その軸として、養子はずっと立っていた。

そうして、瑠璃色の髪の妹分のためなら、何をも厭わぬ危うさを窺わせる養子に。

養子がその『銀色』の手綱をとれるまでは、妹分と養子を、二人にしない方がいい――

養子一人に、妹分を守らせてはいけないと、養父母は早々にそれを見切っていたのだが。

「何をすれば――ラピスの助けになる？」

淡々と『銀色』は、それを尋ねる。

それを尋ねた相手は決して、根本的には、瑠璃色の髪の少女を救わない事を知りながら……それでも彼女を少女が拒否出来ないなら。

「……誰を殺せば、ラピスは……――」

それは、自分の役目であると。

勘の良過ぎる『銀色』に、彼女は微笑み。

そんな――暗くて深い、満月の夜の縁側で。

呪われた契約を交わしかけた者達に。

「――生憎だけど。我が家で生霊とか、全くお呼びじゃないから」

呪いには呪い。事情など全くわからないが、とにかくバカ正直な誰かが、性質の悪い者に捕まりつつある事を感知した赤い髪の少女は。

『『銀色』。『悪霊』、『退散』」

既にそのバカに施されていた呪いを発動した。

「あれ……鶫、ちゃん？」
深夜の縁側に、突然現れた鶫に、ラピスは不思議そうに首を傾げ……害のない顔で笑い。
「そんなに怖い顔して、どうしたの？」
「ユーオン。そいつ、追い払って」
そんなラピスに、容赦なく鶫は。この少年が御所に来てから、密かに教え込んでいた――少年が持つ、ある便利な力の使い道を、今の少年の状態がどうであれ厳と指示する。
「――え？」
ラピスが深い青の目を、丸くした通りに。
鶫のその指示に、びくっと背筋を正して、すぐさま少年は、その懐から一枚の護符……鶫に元々与えられていた武器に、護符を掴む手から僅かに発された白い光を纏わせ。
ぺたりと。ラピスの額にその護符を貼った直後に、少年は金色の髪に戻り。
「……――あれ？　オレ？」
そこでやっと、我に返ったユーオンの前で。
「あれれ？　何これ……有り得なくない？」
微笑んだまま、額に護符を貼られたラピスは、唐突にその姿が薄まっていき――
「何の霊障、もしくは幻想かは知らないけど。『力』である限り、その光には抵抗出来ない」
そしてそのまま、当惑笑いで消えたラピスに。
「……え？？？」
全くわけがわからず、首を傾げるユーオンに、お疲れと鶫は、呪いの解除を伝えていた。
「何か、ユーオンの妹の偽物がいたみたいよ」
「へ？　……それ、消して良かったのか？」
「大丈夫。まず絶対に本体じゃないわよ」
蒼潤達を襲った人形のような、正体不明の相手に対し、無闇に戦うよりも。
正体のわからない、しかしほとんどの力に通じるらしい便利な特性を持ったユーオンのその光を、なるべく負担が少なく活用出来る手段を考え、与えてくれた鶫だった。
「っていうか。オレまた、ツグミに操られた？」
何故か強く、動悸の起こっている胸と。
鶫の声の響きがまだ残ったような、耳元のある機械を、ユーオンは罰が悪そうに触る。
その、出身地不明の少年が喋る言葉は。
元々、言語に縛られない意思の疎通能力を持つ『力』ある者には、何語でも構わないが。
少年はそうした力を持たず、ジパング語で喋る者達の言葉が、本来は全くわからず。
そのため、これまで養父母と遠出する時に使った、相手の言葉がわかる同時翻訳機を、少年は尖った耳にずっと着けており。
「嫌ならそれ、外せばいいだけよ？」
相手の言葉を耳元で翻訳する、その道具は、言葉を確実に少年に届ける……必ず言う事をきかせる呪いの道具化に非常に適しており。
「……ツグミの言う事なら、別にいいけどさ」
その相手は、自分に良からぬ事はさせないと、わかっている少年は、あっさりとそんな……絶対服従の呪いを受け入れているのだった。

『忘却』を司ると、名乗った何かは。
その通りにその後、御所を訪れたはずの、ラピスの存在を綺麗に消していた。
「私と蒼と、櫚しか覚えてないなんてね」
それに憑かれかけた、兄貴分のユーオンすら、すっかり全てを忘れ去っている。
しかし代りに、その何かを消したあの時、何かに触れていたユーオンは……それが持つ、誰かから忘却させた記憶を、一部受け取ってしまったようであり。
「ツグミとユウヤは、気を付けた方がいい。ジュン達を襲った、あの変な人形の狙いは、強い『力』を持った子供みたいだ」
そんな出所の不明な情報を、これまでよりも硬い顔付きで、鶫に伝えるのだった。

＊

—うっわー……すっげー、人形の山だ——
「……」
その『忘却』と相性が良過ぎた少年は。
少年の妹分から、それに巣食う『忘却』が、今まさに奪いつつある記憶だけを観ていた。
—全く。君は本当にバカですよ、水牙君—
「——……」
それは何処にも——有り得なかった世界。
妹分が最近、奇跡を呼んだ時に迷い込んだ、その実の両親が失われなかった世界で。
ラピスという名を持たなかった妹分と。
水華という少女の代りに、水牙という——赤い目で銀色の髪の少年が、存在した世界。
—あのな、シ——
シルファ・セイザー。妹分の本名を、そんな愛称で呼んだ、幻の世界の赤い目の少年は。
—オレのことは……忘れていいから—
幻の世界では南北の四天王の血をひくという、強い力を持っていた少年を、その力が目的と、少年の命を奪い……沢山の人形を操っていた謎の敵の姿を、妹分は見ていた。
毒々しい程に沢山、天使のような姿をした人形があった、『東の大陸』のある教会で。
そこの神父である男が赤い目の少年の母に出した手紙を見て、母の代りに男を尋ねて、少年はその教会を訪れたのだが。
—君ですね……ソール—
そこにいた、薄い灰色の髪で眼鏡をしている、魔の気を隠し持った若い神父と。
—何も……『ピアス』を出す程の事態じゃ、ないでしょうに—
空洞のような真っ黒な両目の、灰色の猫のぬいぐるみを常に抱える、数々の人形を操る力を持った黒く短い髪の幼子が。
ある特別な人形で、少年の命を奪っていた。

黒い髪で青い目の、男の子のような幼子は。
—何か……言い残すことはある？—
「……」
赤い目の少年を、赤い鎧を着た人形の鎌で、確実に殺せる隙として、背後から貫いた後。
倒れ込んで死の間際にいた少年に、そんな……処刑人のような言葉をかけており。
—さすが、前代の北方四天王が、その生涯をかけて遺した人形だけの事はありますね—
その四天王の元居所である、『北の島』にある城に、『オセロット・アーク』という、ある旧い国に伝わる、赤い鎧を着けた少女の絵が掛けられている事を知る者は少ないが。
その少女の絵を元に造られた人形が着ける赤い鎧は、それもその人形を造らせた者が、ある旧い聖地から入手した、おそらく本物の『オセロット・アーク』の遺品と言われ。
存在しないのは多分、赤い目の少年だけで。
その敵は確かに、今も力ある子供を狙うと、実際に人形と戦った青い目の少年には分かり。
……それらの情報は、全て。
幻の世界で、その赤い目の少年に同伴して、危険な教会を共に訪れてしまったシルファと。
現の最近、『北の島』を訪れたラピスが、そこの城にあった絵を見て知った事を、幻と現の情報をごちゃ混ぜにしつつ、しかし——限りなく、この現世の正確に近い形で。
前代の北方四天王と、因縁の深い養父母を持つ、ラピスだからこそ再現出来た情報で。
—お願い……誰か……水牙を、助けて—
存在しなかった少年を消却することに。
ただの幻に過ぎない時を、どうして少女は。
そこまで現に——その銀色の髪で赤い目の少年を、真の存在と感じてしまったのか。
「……何、で……」
その『忘却』を受け取った時から。
毎夜、激しい吐き気を覚えている彼は。
「何で……キラ、が……」
やっとそれだけ、口にした名が、赤い目の少年を指す事や。それがそもそも誰なのか、混乱の中、青い目の少年は何も自覚出来ず。
「何でキラを……——が、殺すの？」
あまりに数多なその情報。彼にとっては、濃密な縁が詰まり過ぎた、『忘却』の記憶に。
—助けて……水華——……—
その水華が存在しない、全くの幻の世界は。
確かな現と、二つの奇跡を元に構成された、ラピスを心から追い詰める存在感を有する、有り得た世界である事を誰も知る由もなく。

「もう、本っっ当に！　すみませんでした！」
突然、その花の御所という邸宅の前で。
ひたすら頭を下げまくる、年端もいかない顔見知りの少女に。
「いやいや。ラピ嬢ちゃんが謝る事なんて、何一つないだろ」
「……」
娘の友達にそこまで謝られ、焦る侍の男と。
その隣で黙り込み、紫の目をまん丸くして、少女を見る――侍と同じような恰好をして、珍しい剣を下げている金色の髪の少年に。
「ほら、ユーオンもちゃんと、お礼言って！　と言うか謝って！　死ぬ程頭下げて、陳謝！」
「……」
半ば本気らしい少女に、呆気にとられた後。
「……えっと」
少年は侍の方を向いて、ぺこりと頭を下げ。
「有難う、ゲンジ。今まで世話になりました」
あまりにあっさり、その御所での修行生活の……終了宣言をしたのだった。

「うわ。ラピちゃんだ、今度こそは本物の、ラピちゃんだ」
「今度……こそ？？」
肩の上に、怪奇・顔だけデブ猫。のような、謎の生物を連れて、首元に笛のペンダントを下げる瑠璃色の髪の少女、ラピスは。
久しぶりに会えた、帽子がよく似合う少年楓の謎な台詞に、ひたすら首を傾げる。
「それにしても本当……まさかユーオンが、鶫ちゃんのお家で、お世話になってたなんて」
それを楓が、伝話で教えてくれた後、丁度、そろそろ南の島を出ようと考えていたらしいラピスはすぐさま、親戚の少女水華と二人、ジパング行の船に乗ったらしく。
「ごめんね、くーちゃん。ちょっと女の子を一人で待たせてるから、一旦家に帰るね」
「うん。ユーオン君は後で、ちゃんと送るよ」
急ぎの中、楓にはそうしてしっかり顔を見せ。

何やら、御所を出る相談が色々と必要らしい兄貴分を置いて、先に帰ったラピスだった。
「……」
その、これまでと全く変わらない後ろ姿に、偽物ラピスの存在だけ後で知らされた楓は、ふと、ラピスに初めて会った頃を思い出す。
「そういやあの頃、ラピちゃんあんまり……笑わなかったな」
それに比べ、現在は常時笑顔であるラピスのその表情には、出会った頃の難しい顔の方が感情があった事に、今更のように思い至り。

『忘却』を宿す少女の、危うげな明るさに。
それを決して彼らに知られたくない少女の、消えない笑顔が、それだけがたった一つの、切実な願いである事を無意識に感じてか。
それ以上はあえて踏み込みはせず……その上で少女をいつも笑って迎えてくれる友に。
少女がどれだけ救われているか知るのは。
おそらく、『忘却』だけだったとしても。

「良い良い、気にするな」
「……」
剣の師に唐突に、自宅に帰る旨を告げた後で。
少年をそもそも、この御所に連れてくる事にした男に、最後に少年は挨拶に行ったが。
「またいつでも、お主の好きな時に、遊びに来れば良い。他にも何か、困った事があれば、遠慮なく相談に来れば良いのじゃよ」
「……有難う、ヨリヤ」
剣を習うためと、御所に世話になる事を決め、妹分が帰ってきたから帰ると、全く少年側の……最初から最後まで我侭を通してくれた、その身元引受人は、筋金入りのお人好しだと、初対面で既にわかっていた少年は。
「……だから。何か……怖いのかな」
ぽつりと、どうあっても、その優しい場所に、長く留まる事は出来そうにない心を呟き。
迫る破綻を隠す家へ、少年は帰っていった。

「……？」
その人形の一つが、謎の白い光で壊された時。
幼子は強く、青く鋭い目の顔をしかめ。
「どうしました？　ソール」
自分をそう呼ぶ、目の前の神父の魂になると。
それは自らの仕事と受け入れた……灰色の猫のぬいぐるみを抱える誰かは、ただ呟いた。
「……『ピアス』を、起こさなきゃ」
他者の都合で、本来は澄んだ魂を穢され、魔とされた、白銀の髪で蒼い目の男の虚心は、幼子が知る、ある少女の兄によく似ており。
「誰か、面白い死者でも見つけましたか？」
「うん……アイツ以上の、死神がいたよ」
物分りの良さで、数々の死者に取り入り、死者が宿る人形を動かす才能を持った幼子は、
「オマエ達もアイツも……ピアスも彼らも」
その周囲すら、同じ闇に在ると知るように。
「みんな……死者の一族……」
その猫の内の珠玉と、透明な玉の柄の剣が、青銀の死神の導きで出会う、忘却の時は近く。